

## 今日もまた少し

榊田翔希

奨励者紹介[ますだ・しょうき]  
日本キリスト教団尼崎教会牧師

神は言われた。

「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

神は御自分にかたどって人を創造された。

神にかたどって創造された。

男と女に創造された。

(創世記 1章 26—27 節)

### 新しい体験

おはようございます。尼崎教会で牧師をしています、榊田と申します。本日はこうして共に礼拝を守ることができ感謝です。尼崎教会はJR尼崎駅と阪神尼崎駅のちょうど中間あたりにある教会で、今年で創立126年を迎えました。戦前から続く歴史がある教会ですが、私はこの教会に赴任して今年で二年目を迎えました。126分の2と思うと気の遠くなるような、そして自分の小ささを痛感するものでありますが、ぼちぼちと生きています。ほかに尼崎教会がどのような教会かと言いますと、関係施設で保育園がある教会です。私は保育園には毎日関わっているということではないのですが、週に一度礼拝のお話に通っています。

個人的に保育園に来る年齢の子どもと関わるということは、今までの人生であまりない経験でした。中学や高校の非常勤講師として聖書科を担当したことがあったり、教会に来る小学生と遊んだりしたことはありましたが、保育園に来る子どもたちは0歳から6歳の子どもたちで、どう接したらよいかよくわかりませんでした。おっかなびっくりだったのですが、今年度から週に一度の礼拝でお話をする事になり、そのあとは子どもたちと遊んだり、給食と一緒に食べたりして一日を過ごしています。子どもと遊ぶということも今までに経験がなく、コロナ禍でオンライン会議ばかりで弱った体には良い運動になっています。毎週、筋肉痛に襲われてプロテインを買ったりしていましたが、最近は何とか体が慣れてきたかなと思っています。

体も鍛えられているのですが、時に子どもからドキッとするようなことを言われることがあります。先日ドキッとしたのは、「牧師先生って何ができるの」という言葉でした。保育園には、いろいろなプロたちが集まっています。保育士や給食を作る人、お医者さんなどいるわけですが、その人たちに比べると牧師という人間の専門性は何と説明したらよいでしょうか。そもそも、牧師としてのキャリアも少ないので、自信をもって答えることもできず、返答できず、沈黙を決め込んでしまいました。

気の利いたことも言えないのですが、子どもたちは私にいろいろなことを教えてくれます。この間はポー

ドゲームを教えてくださいました。私は覚えたばかりで全然うまくなく、すぐに負けてしまいます。悔しいので家に帰ってYouTubeで必勝法を調べたりしています。ほかに子どもたちの間ではやっている、トランプゲームであったり、知らないことばかりで覚えるのが大変です。ちなみに尼崎では、じゃんけんの掛け声はいんじゃんほいのようなようです。

### どっちでしょう

逆に私から教えることもあるのかなあとか思います。先日、ある子どもから「神さまは男か女かどっち」と聞かれたことがありました。一般の神はイメージとして「男性」のイメージで語られる場合が多いですが、聖書の神を説明する時、全能の存在でありますし男というイメージのみにとどまるものではないという思いと、男女平等という世の中ですから、私はそこで「男でも女でもない」と答えました。その時はうまく答えられたと思っていたのですが、大学時代に全能の神に否定形を使ってはいけないと習ったことを思い出しました。すなわち「男でも女でもない」ではなく「男でもあり女でもある」と答えたほうがよかったのかなと思いました。そんなことを考えていると「牧師って何ができるの」という言葉が胸に刺さります。

### 聖書を読む

さて、今日は聖書箇所として旧約聖書の最初にあります創世記から、天地が創造されて人間が創られた時の場面を伝える箇所を選ばせていただきました。世間では進化論が広く信じられていて、私も進化論を否定してはいないのですが、聖書の創世記を読む時は実際に起こったこととして創造の物語を読むということではなく、聖書を通して私たちが人間という存在を考えた時、どのように捉えているのかという問いかけとしてこの箇所を読みしたいと思います。創世記には二つの天地創造物語が書かれており、それぞれ書かれた年代が違うということが言われていますけれども、今日お読みいただいた箇所では、神の姿に似せて男女が同時に作られています。

しかし、日本では神というと男性としてイメージされることが多いのではないのでしょうか。日本の神話では性別を男と女に分けて考えるなら、両方の性があるわけですが、キリスト教の神となると、絵画の影響などもありひげを蓄えて、筋肉隆々の神がイメージされることが多いと思います。例えば無料のイラストを検索する時に「神」と入れるとそのようなイラストが出てきました。また、現代の日本の教会で神のことを指して「父なる神」という呼びかけがよくされます。聖書にも出てくる表現であり、おそらく日本の教会では広く浸透している表現ですが、多くの場合で神は男の姿という限定されたイメージで語られてきたということは、明らかなことです。神さまは男か女なのか、歴史的というか実状的なことを言えば、男であると答えるのが現代社会では楽なのかもしれません。

フランスの国立教育機関に所属する聖書学者のトーマス・レーマ先生の、翻訳された著書で『ヤバい神 不都合な記事による旧約聖書入門』（2022年 新教出版社 白田浩一訳）というのがありますが、それを読んでいますと、4歳の子どもから「神さまは男なの」と質問されたという事例が一章のはじめに紹介されていました。同じ質問がされているなど思いながら読んでいますと、神という存在について「男性には限らない」ということについて説明がされていました。人間が神に似せて作られたということはどういうことなのか、これまでいろいろな議論がされてきたようで、知性が似せられたのか、言葉が似せられ

たのか、いろいろなことが言えるわけですが、著書の中では「人間の側面ということではなく、存在全体」として似せてつくられたということではないかとなっていました。神の姿に似せて人間が創られ、それは単一の人間としてではなく、男と女という形、すなわち複数の形として人間は創造されたと解釈することができます。続けて著作の中では「男性のみでは神のかたちと呼べない」とありました。当たり前ですが、神がどのような形なのかを知ろうとした時、私たちのうちだれか一人だけでその姿を知ることができないということです。

男性と女性という概念について、現代に続くまで、性別による分業制や家父長制など差別的な風習や文化がたくさんあります。神の形が「男と女」のみで説明できるという風に解釈できるかもしれませんが、同時に作られたという平等性は、男中心で神の形は捉えられないということです。男や女という枠を超えて、私たちは一人ひとりが神の似姿なのです。そう思った時、私たちが日々で経験する多くの他者との出会いは、少しずつ神の姿形を知る出来事なのではないでしょうか。神の姿形はどのようなものであるのか、それは「あなた」のようであり、「わたし」のようである、そういうことなのではないでしょうか。

私たちは一人ひとりが多様な個性をもって生きています。顔も違えば性格や考えも違い、多くの差異を持っています。この差異があるせいで、争いや軋轢・喧嘩が起こります。どうしても埋められない溝に出会うことがあります。しかし、逆に言えば差異があるからこそ私たちは向き合うのであり、つながることができるのです。このような世界の様子を聖書に照らして読むならば、差異との出会いはすなわち、神の姿をまた少し知らされるということなのではないでしょうか。

### 神の像は必要ない

神は男であるのか女であるのか、この質問を受けたことを思い返すと、豊かな姿に創られた世界の中に、他ならない私たちが存在しているということを教えられたように思います。「男でもなく女でもない」のではなく、神の姿形とは「女でもあり、男でもある」そして「あなたであり、わたしでもある」、あなたに神さまの似姿を見ることができる、そのようなことを教えられた瞬間でした。

旧約聖書の中で、神さまの像を作ってはいけないという偶像崇拜禁止の考えは、よく言われる特徴的なものではないかと思います。日本で生活していると、神さまの銅像や石像なんかはよく見ますので、特に違和感もなくなってしまうのですが、旧約聖書はこれを禁止しました。銅像ぐらいあったほうがありがたいがられるような気もしていましたが、この銅像がないということ、人間が神の姿に似せて作られたということに関連して考えると、もはや神の姿形を知るために、私たちは新しく銅像を作る必要はないということなのかなと思います。

聖書は男性中心や偏った性別で解釈されることが多くあります。しかし、この世界を、私たち人間を一人ひとりが神に創られた存在であると、とらえることができます。神の姿形を理解しようとして、銅像を作る必要はなかったのです。新しい偶像を造るのでなく、この生活の中で、すでに私たちは神の姿に出会っているのです。